

# スペイン語 EN 否定における前置詞句の意味役割に関する考察

田林 洋一

## A consideration for thematic roles of the prepositional phrase in Spanish negation with EN

Tabayashi, Yoichi

### Summary

This paper examines the thematic roles of the prepositional phrase in Spanish negation using EN by applying Localist Theories. Firstly, I make a survey of the Localist Theories by Jackendoff (1990), Baker (1988) and Kaga (2001). Secondly, I state that almost all earlier investigations on event structures take the Localist Theory for granted and arbitrarily decide thematic roles. I propose three Macro thematic roles (AGENT, PLACE and THEME) and as a subclass thematic role features. Each thematic role features can correspond to one Macro thematic role, so each Macro thematic role has its own characteristics without changing individual natures of Macro thematic roles.

By applying this consideration, we can avoid the problem that multiple thematic roles can correspond to one argument. Without violating Chomsky's Theta Criterion (1981) we can explain the relation between argument structures and thematic roles. Thematic role features can be distributed in many areas as well as the usual semantic features, so for future considerations it is necessary to restrict the number of thematic role features.

## 0. 序

本稿はスペイン語の EN 否定における主題化された EN 前置詞句の意味役割を規定することを目的とする。意味役割を規定するためには事象構造の体系的な記述を明確にする試みが必要不可欠であり、これまで様々な研究がなされてきた(次節参照)。本稿における「EN 否定」とは、以下の例文における否定表現を指す。

- (1) a. En toda la tarde agarró una rata.
- b. En tu vida has trabajado, Pedro.

Bruyne (1999)

(1) では否定辞 (*palabras negativas*) が現れていないが、意味的に否定極性 (*polaridad negativa*) を持つ。本稿では特に明記しない限り、EN 否定を「EN を伴う前置詞句の存在による、否定辞を伴わない否定」と定義する。

## 1. 先行研究

意味役割の規定に必ずと言っていいほど付随する事象構造の体系化は様々に研究されており、初期のものでは Gruber (1965) や Vendler (1967)、最近の研究では Lakoff (1987)、Jackendoff (1990)、Langacker (1991)、Croft (1991)、中右 (1994)、Pustejovsky (1995)、Goldberg (1995)、Levin and Rappaport Hovav (1995)、Jackendoff (1997)、大堀 (2002) 等が挙げられる。しかし、これらの先行研究には共通して二つの現象が見られる。一つは Hartung (1831) 等を発端とし、Anderson (1971) や池上 (1975, 1981) 等に受け継がれた場所理論 (Localist Theory) をいわば暗黙の事実として前提していること、もう一つは意味役割の規定が先行研究でほぼ恣意的に決定されているため、意味役割のリストが曖昧であるということである<sup>1</sup>。本節では以上の二点を絞り、Jackendoff (1990)、Baker (1988)、加賀 (2001) を先行研究と位置づ

け、問題点を指摘する。

### 1.1 場所理論の概説

場所理論は 19 世紀前半に生み出された言語記述に関する一定の考え方であり、その大まかな主張は「格及び前置詞の意味は、物理的かつ知覚可能な空間関係に基づいて成立し、それが抽象的かつ知覚不可能な事象にも拡張される」というものである。以下の例文を参照。

- (2) a. El coche fue desde Madrid hasta Barcelona.
- b. Pedro le dio muchas monedas a María.
- c. Juan tradujo este documento del ruso al finlandés.
- d. José ganó el libro de Juliana.
- e. La rana se convirtió en el príncipe.
- f. Pepe entró en Madrid.

(2a) は最も基本的な位置関係を表し、車が物理的に Madrid から Barcelona に移動したことが表現されている。そして、desde と hasta の存在から、従来の場所理論は Madrid の意味役割を「起点」、Barcelona のそれを「着点」と分析する。(2b) は物理的にコインが Pedro から María に移動しているので、Pedro が「起点」、María が「着点」となる<sup>2</sup>。(2c) は Gruber (1965) のいう同定の変化 (transition of identification) であり、文書の様態がロシア語からフィンランド語に変わるという知覚可能な物体が抽象的な変化を起こしている例である。よって、ruso が「起点」、finlandés が「着点」となる。(2d) は抽象的な所有の変化 (transition of possession) であり、José が Juliana から本を獲得したため、所有権は Juliana から José に移る。従って Juliana が「起点」であり、José が「着点」である。(2e) では蛙が王子に変わったという状態変化を示す。状態変化はある抽象的な場所から別の抽象的な場所へ向かっての移動と考えられているため、rana が「起点」、príncipe が「着点」となる。

(2f) では Pepe が Madrid に入るという物理的移動を表しているが、

起点は明示的に現れず、Madrid が着点となる<sup>3</sup>。

しかし、場所理論の欠点として、①物理的移動と抽象的移動の差異が明確ではない、②幾つかの文では起点と着点の意味役割が曖昧になる、③一つの語彙要素に複数の意味役割が割り振られることがある<sup>4</sup>、等が挙げられる。特に二番目の問題点は致命的な欠陥を引き起こす。

(3) a. The money belongs to John.

b. John is in the money.

加賀 (2001 : 111)

加賀 (2001) は、(3) から従来 of 場所理論の説明では、同じ事象である (3a) と (3b) において、「場所」の意味役割と「主題」の意味役割が交代可能であると述べている<sup>5</sup>。

## 1.2 Jackendoff (1990) の意味役割の扱い

Jackendoff の研究は一貫して場所理論を援用し、述語分解を通して概念構造 (語彙概念構造) や項構造を規定することを目的としている。Jackendoff では一つの語彙に記載される情報があまりに多すぎるという欠点こそ散見されるものの<sup>6</sup>、事象構造を生成文法の枠組みから説明しようとする試みはある程度成功しているように思われる。

Jackendoff は主語や目的語、前置詞句といった文法関係に着目するだけでは意味役割に十分な説明を与えることが出来ないと主張し、Gruber (1965) の主題関係のような意味的概念が意味役割の分析に必要なだと述べてきた。Jackendoff は、Gruber の主題関係を基盤とした上で、要素間の力学的影響関係を記述するための表示レベルとして、新たに行為層 (action tier) の考え方を導入して意味役割に妥当な説明を与えようと試みている。

(4) The car hit the tree.

(5) a. INCH [BE ([CAR], [AT ([TREE]) ])]

b. AFF ([CAR], [TREE])

Jackendoff (1990) 一部改

(5a) は (4) の主題関係を表す主題層であり、車と木の位置関係及び移動関係が表されている。この層だけでは car は主題であり、tree は場所という従来の説明と変わりはない。(5b) は行為層であり、車と木との力学的影響関係が表されている。(4) の car は影響を及ぼす要素で、tree は影響を被る要素である。従来の意味役割では「行為者」と「被動作主」にほぼ相当する。

Jackendoff が意味役割を二層構造にした理由は、①意味役割が一定のカテゴリーに分類されていないためにおこる対応関係の弊害を解消すること、②一つの要素に複数の意味役割が与えられる可能性を説明しようとしたこと、③主題層で与えられる意味役割と行為層で与えられる意味役割の対応関係が様々であること、等が挙げられよう。しかし、この二層構造には、①意味役割を「影響」というカテゴリーのみで当てはめたため、「影響」の定義が明確ではない(例えば、「経験者」、「被動作主」、「受益者」といった意味役割があると仮定すると、これらが行為層に分類されるのか主題層に分類されるのかが曖昧である)、②二層構造において、意味役割を与えられない空の項が設定されてしまう、などの欠点がある。

(6) Bill entered the room.

(7) a. GO ([BILL], [TO ([IN ([ROOM])])])

b. AFF ([BILL],  $\phi$ )

(6) では、Bill は主題層においては GO の「主題」、行為層においては「行為者」の意味役割が与えられているが、room は主題層における「場所」の意味役割しか与えられていない。従って、ある層では意味役割が与えられている語彙が、別の層では意味役割がどこからも付与されないという奇妙な事態に陥る。この点について、Jackendoff は明確な説

明を与えていない。

### 1.3 Baker (1988) の意味役割の扱い

Baker (1988) は、Chomsky (1981) が提唱した生成文法の枠組みから意味役割を規定しようと考えた。Baker は動詞句シェル (VP shell) 構造を前提として、VP1 の指定部 (Specifier) には動作主又は原因、VP1 の補部にある VP2 の指定部には場所 (着点、起点、経路、所有者、受益者、被動作主、経験者等)、VP2 の補部には主題及び結果といった意味役割が割り振られると仮定した。これは「主題役付与一様性の仮説」 (Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) と呼ばれるもので、同じ意味役割を持つ要素は同じ統語的位置に生成される、という仮定である。以下の例文を参照。

- (8) a. John broke the window into pieces.
- b. I gave him a book.
- c. Mary is a student.
- d. Mary is in the state of being a student.

(8a) では VP1 の指定部にある John が動作主の意味役割を持ち、VP2 の指定部にある window は被動作主、VP2 の補部にある into pieces は結果の意味役割を持つと主張する。window は主題の意味役割を持つとする考え方もなされうるが、Baker は意味役割を統語的な位置と直接的に結びつけるという方法で意味論と統語論のインターフェイスを確立しようとした結果、(8a) における window の意味役割は主題ではなく被動作主であると主張している。しかし、(8b) では (8a) における window と同じ直接目的語の位置にある book が主題となり、him が VP2 の指定部にあるとして被動作主の意味役割を持つことになる。(8a) と (8b) の直接目的語がそれぞれ VP2 の指定部と補部にあることで意味役割が違うとするならば、book と window の動詞に対する意味的な差異がなけ

ればならないが、両者とも動詞の影響を被っていて何らかの変化を受けているという点で変わりはないように思われる。

更に (8c) のようなコピュラ文では、**Baker** に従えば **Mary** が動作主となるが、**student** の立ち位置が動詞シェル構造では規定できないため、結果として **student** の意味役割が定まらない。これを避ける方法としては (8c) は (8d) の構造を持つとすること<sup>7</sup>だが、(8d) が (8c) の意味的表示とするならば、他の **be** 動詞を伴う文も同様に分析可能であり、**Baker** の動詞シェル構造を導入する必要がない。

更に、**Baker** の分析では、英語以外の言語に対応できないことがある。

#### (9) *Le dio una carta a María en la sala.*

(9) の *le* は間接目的語の代名詞が VP2 の指定部から移動 (Move)<sup>8</sup> されていると仮定する。すると VP2 の指定部は痕跡になり、音形を持たない要素に意味役割が付与されることになる。生成文法では痕跡に意味役割が付与されることは認可されているが (e.g. *John<sub>i</sub> was kissed trace<sub>i</sub>*)、人称代名詞が間接目的語に来ると、間接目的語の代名詞 *le* に呼応する人称代名詞の省略が許され (*Le dio una carta (a ella) en la sala*)、意味役割は *le* に付与されるか、音形のない *ella* に付与されるか、あるいは両方に付与されるかの決定が曖昧になる<sup>9</sup>。結果としてミニマリスト・プログラムの前提である統語論の自律性と論理形式が失われることになり、生成文法の枠組みから説明がつかなくなる<sup>10</sup>。

#### 1.4 加賀 (2001) の意味役割の扱い

加賀 (2001) は、今までの場所理論、特に **Jackendoff** (1990) に修正を加え、新たな理論を展開した。その特徴は、①意味役割は「動作主」、「場所」、「存在者」の三つに大別され (マクロな意味役割)、更に個々のミクロな意味役割を与えられる、②意味構造は単層方式で、一つの項に一つの意味役割を当てはめる、③マクロのレベルにある「場所」の意味役割は影響を受けるか否かで変化する、④構造的具現化規則によって単

純な「場所」の項は前置詞句として具現化されるのに対し、影響を受けた「場所」は名詞句として具現化する、⑤具象と抽象を可視と不可視の観点から選別することで be 動詞文の意味役割を再規定する、とまとめられよう。

①において、マクロな意味役割を設定することで、更に再分類化するという点を本稿では修正し、新たな枠組みとして提示したい（第2節参照）。②については Jackendoff (1990) が指摘しているように、(生成文法の枠組み以外で) 項と意味役割を一対一で対応させるには無理がある（詳しい反論は Jackendoff, 1990 : 59-70）。更に、マクロな意味役割を設定する利益は統語論とのインターフェイスを③及び④によって（大まかに）確立させることだが、「影響を受ける」という概念が曖昧なままである。以下の文を参照。

- (10) a. John is in the room.  
b. John is in good health.  
c. John is healthy.
- (11) a. There is a man in the room.  
b. ?There is a man in good health.  
c. ??There is a man healthy.

加賀 (2001 : 107-108)

(10) は従来の場所理論では述部が場所、主語が存在者の意味役割を持つとされるが、there 構文を適用した (11) では (11a)、(11b)、(11c) の順に容認度が下がる。この容認度低下の原因を述部が抽象的であるからとする説明に対し、加賀は以下の文が適切であるとして反論している。

- (12) a. There are some scorpions belonging to Simon.  
b. There are counterexamples known to me.

Diesing (1992)



(12) の文法性を説明するため、加賀は (10c) においては主語の **John** が場所の意味役割を、その **John** の持つ特性ないし属性を表しているという意味で述部の **healthy** が主題の意味役割を持つと主張する。この主張の裏づけとなるのが⑤の抽象と具象の関係である。つまり、抽象とは常に不可視のものであり、逆に従来の状態変化などが抽象的な移動として捉えられてきたものは、変化した状態を可視できるため、実は具象的な移動としている。

(13) a. John translated the letter from Russian into English.

b. Bill broke the bowl into pieces.

加賀 (2001 : 104)

(13) は「手紙の使用言語に関する変化は、その文字を見ればすぐに確認することができる。また、ボウルの形状変化は、明らかに観察可能な物理的現象である (加賀, 2001 : 104)」と説明される。

しかし、状態変化はその結果が目に見えるから具象的な移動であるとする主張は議論の余地がある。つまり、加賀は抽象・具象をあくまでも可視・不可視と同列に扱っているが、可視であっても所有文のように抽象的な移動をすることはあるし、不可視であっても具象的な移動をすることがある。(13) は抽象的な移動をした結果が可視的であるというだけで、移動のプロセスである (13a) のロシア語から英語への翻訳過程は具体的な物理的要素に直接関係はない。また、(13b) においては、ボウルの可視的な移動が主張されているわけではない。

更に、(11) 及び (12) の容認度の差は、移動の抽象度とは無関係である。there 構文はあくまで前置詞句内の名詞句が抽象的か否かによって左右されるため、(11a) の **room**、(11b) の **in good health**、(11c) の **healthy** の順に抽象性が高くなり、よって容認度が低くなるのは自然である。また、(12) における前置詞句内の名詞句 **Simon** と **me** は具象的であるため、容認度が低下しない。

## 2. 本論

前節では先行研究の概略を述べ、その批判的検証を行った。本稿では従来の場所理論と同様に、主語が「行為者」、前置詞句が「場所」、目的語が「主題」の意味役割を担うとする立場を取る。更に、加賀（2001）のマクロな意味役割である「行為者」、「場所」、「主題」の存在を認めるが、その下位分類としてミクロな意味役割を網羅するのではなく、意味役割にも従来の語彙分析と同様に意味素性がマクロな意味役割に付随する形で存在すると主張する（以下、本稿では意味役割に存在する意味素性を意味役割素性と呼ぶ）<sup>11</sup>。これは Jackendoff（1990）の二層構造のように二つの異なる次元の意味役割を設定するのではなく、マクロな意味役割はそれぞれ独自に意味役割素性を持ち、それによって様々な意味の差異を説明しようとする試みである。以下の文を参照。

- (15) a. John gave a book to Mary.
- b. Mary received a book from John.
- c. John gave Mary a book.

(15) は事象構造が同じ（John から Mary への本の所有権又は物理的移動）とされ、従来の場所理論を土台とした分析では命題の意味は同義とされてきたが、含意される意味は異なる。認知意味論では、John と Mary のプロフィールから (15) の意味の違いを説明することが可能であり<sup>12</sup>、本稿も原則的に認知的な立場を支持するが、単なる際立ちだけでは説明のつかない意味役割素性の相違もある。以下、(15) の意味役割を個別に分析する。

まず、(15a) では、John が「与える」という行為を行い、与えた主題が book、与えられた着点、即ち場所が Mary になるという点で、John のマクロな意味役割は「行為者」、book は「主題」、Mary は「場所」となる。それぞれの意味役割に付随する意味役割素性は、<+実行者>、<+被動作主、+対象>、<+被動作主、+受益者>といった形になる<sup>13</sup>。

同様の分析を(15b)で行うと、Maryは「もらう」という行為を行っているため「行為者」のマクロな意味役割が与えられるが、積極的に実行しているわけではなく、Johnによって利益を得るため<+受益者>という意味役割素性が付随する。この意味役割素性の付随により、(15a)のJohnとの意味的差異が表現される。bookは(15a)のbookと振る舞いは同じであるため、「主題」のマクロな意味役割に<+被動作主、+対象>という意味役割素性が付随する。Johnは「場所」というマクロな意味役割に、Maryに対して積極的に影響を及ぼしているため、<+起点、+影響者>という素性が付随する。

次に(15c)を見ると、(15a)と事象命題はほぼ変わらないが、モダリティを含んだ意味は異なる。Johnの意味役割及び意味役割素性は(15a)のそれと変わらないが、Maryのマクロな意味役割は「場所」、意味役割素性は<+被動作主、+受益者、+着点>となる。 (15a)と違い着点が意味役割素性に加えられているのは、(15a)では本をMaryの「方に」与えたというだけで、Maryが本当に本を受け取った(即ち、本という主題の着点になった)かどうかは保証されていないからである<sup>14</sup>。そしてbookの意味役割素性は(15a)と変わらないので、「主題」<+被動作主、+対象>となる。以下、それぞれの対応関係を挙げる。

(16) a. John gave a book to Mary.

John : 「行為者」 <+実行者>

book : 「主題」 <+被動作主、+対象>

Mary : 「場所」 <+被動作主、+受益者>

b. Mary received a book from John.

Mary : 「行為者」 <+受益者>

book : 「主題」 <+被動作主、+対象>

John : 「場所」 <+起点、+影響者>

c. John gave Mary a book.

John : 「行為者」 <+実行者>

Mary : 「場所」 <+被動作主、+受益者、+着点>

book : 「主題」 <+被動作主、+対象>

本稿の主張は、例え同一事象の命題であっても表現に違いがある限り、与えられる意味役割は異なるということである。(15) は全て同一の命題 (John から Mary への本の移動) を表しているが、表現に違いがあるために与えられる意味役割が異なる<sup>15</sup>。この時、マクロな意味役割の違いもミクロな意味役割素性違いも、二文間の意味の違いの大きさとは関連がない。(16a) と (16c) は意味役割素性のレベルで、(16a) と (16b) はマクロな意味役割のレベルで、それぞれ異なっているが、表現されている事象そのものは同一である。即ち、意味役割の違いが個々の言語表現における「意味の違いの程度」とでも呼ぶべきものを算定する基準にはならない。

Jackendoff (1990) らは生成文法の  $\theta$  理論への反論として「一つの項に複数の意味役割が与えられることがある」と主張するが、本稿では項とマクロな意味役割 (行為者、場所、主題) の関係において基本的に一対一の対応を認める。しかし、マクロな意味役割に下位レベルの意味役割素性を複数与えることによって、同一の事象を指す異なる言語表現下での意味の違いを表すことができると考える。更に以下の文を検討する。

- (17) a. John is in the room. (= (10a))
- b. John is in good health. (= (10b))
- c. John is healthy. (= (10c))
- d. John is a student.

(17) の John は状態という動作<sup>16</sup>を行う「行為者」であるが、動作に積極的に働きかけているわけではなく、存在しているだけなので <+存在者> の意味役割素性を持つ。一方、(17a) の room は「場所」のマクロな意味役割を持ち、<+具体的> という意味役割素性を持つ。(17b)

の good health、(17c) の healthy も「場所」のマクロな意味役割を持つが、それぞれ前者は<+抽象、+一時的>、後者は<+属性>という別個の意味役割素性を持ちうる<sup>17</sup>。

意味役割に意味役割素性を付随させることの利点は、①項と意味役割の対応がマクロな意味役割においては一対一で対応できること、②同一事象表現に含意された意味的差異を意味役割素性で分析できること、③マクロな次元では「行為者」「場所」「主題」の三つの意味役割に還元され、アドホックな意味役割を設定する必要がないこと（但し、意味役割素性がアドホックになる可能性がある）、④意味役割に対して要請される諸々の意味的相違を明らかにできること、等が挙げられよう。

次節では EN 否定における主題化された前置詞句の意味役割及び意味役割素性を決定し、個別に論じる。

## 2.1 EN 否定における主題化された前置詞句の特徴

EN 否定が生じる際に、EN 前置詞句が主題化されなければならないという条件がある（詳しい議論は Bosque, 1980、田林, 2006 他を参照）。更に、主題化された EN を伴う前置詞句は、以下の特性を持っていないなければならない。

- (18) 原則として EN は広範な範囲を指し示す名詞句（主に時間表現）、またはある特定の広範ないしは全体を指し示す名詞句と結合しなければならない。

田林 (2006 : (15 ii))

EN 前置詞句に現れる名詞句は抽象度の影響を受けない（しかし意味役割を考える際に抽象度の概念は必要である）。以下の文は全て EN 否定である（EN 前置詞句内の名詞句は (18) の条件を満たし、かつ空間表現か時間表現かに関わらず極性変化を起こしている点に注目。1.4 節参照）。

- (19) a. En mi / la vida he oído semejante disparate.  
 b. En toda la tarde fue capaz de decir nada coherente.  
 c. En todo Madrid se puede encontrar hombre más feliz que Pepe.

Sánchez López (1999 : 2603)

主題化された EN 前置詞句は (18) の制約を意味的に受ける。この制約は、主題化された EN 前置詞句の意味役割素性に起因する。即ち、EN 否定の前置詞句の意味役割素性は (18) の条件を満たすものでなければならない。以下、(19) の EN 前置詞句の意味役割と意味役割素性を検討する。

前節の主張を応用すると、(19) の EN 前置詞句のマクロな意味役割は「場所」と考えてよい。(19a)、(19b) は時間的 (抽象的) な場所を指し示し、(19c) は空間的 (物理的) な場所を EN によって指し示している (ここでは抽象的な場所と物理的な場所に明確な境界線を引かない。1.4 節及び注 14 を参照)。そして、共通して付随する意味役割素性は <+広範> と規定できよう。以下を検討する。

- (20) a. #En un instante he oído semejante disparate.  
 b. \*En la tarde fue capaz de decir nada coherente.  
 c. ?En Madrid se puede encontrar hombre más feliz que Pepe.

主題化された EN 前置詞句において <+広範> の意味役割素性を持たない (20) を見ると、(20a) のように容認不可能か、(20b) のように非文になるか、(20c) のように肯定解釈を取るかしかない ((20b) 及び (20c) では todo / a がいないため <+広範> の意味役割素性を失っていることが統語的ないしは形態的に明示されていることに注目)。特に (20a) では否定環境ではないのに否定極性項目 semejantes disparates、(20b) では否定環境ではないのに否定語 nada が出現していることで、容認度の

低下ないしは非文の原因となる。

即ち、EN 否定において、主題化された EN 前置詞句は〈+広範〉の意味役割素性を持たなければならない。従って、(18) の条件は意味論的に以下のように要約される。

- (21) EN 否定における主題化された EN 前置詞句は「場所」の意味役割を持ち、〈+広範〉の意味役割素性を持たなければならない。

(21) は (18) の条件を意味役割に求めたものである。ここで問題になるのは、(21) は EN 否定の原因なのか結果なのかということである。即ち、主題化された EN 前置詞句が (21) の条件を兼ね備えているから EN 否定が起こるのか (原因)、それとも EN 否定において主題化された EN 前置詞句は (21) の条件を自動的に満たすのか (結果)、の区別である。結論から述べると、(21) 及びその他の EN 否定における統語的条件を満たしていても EN 否定が起こらない表現は存在する<sup>18</sup>。更にプロソディや語用論的要素によって極性が変化することもあるので、(21) は EN 否定において必要条件ではあっても十分条件ではないと思われる<sup>19</sup>。

### 3. 結語

本稿では、EN 否定における主題化された EN 前置詞句の意味役割がある程度定義可能なことをみた。その際、①加賀 (2001) に従い、「行為者」「場所」「主題」の三つのマクロな意味役割、②マクロな意味役割に付随する意味役割素性、を仮定し、従来の場所理論に土台を置く意味役割の説明を試みた。今後の課題として、①意味役割素性が有限個に還元されうるかを確かめること、②EN 否定におけるその他の項に対応する意味役割に共通性がないか調べること、などが挙げられよう。

更に、本稿のアプローチを採用すると Jackendoff らが提唱する項と意

味役割の不均衡の問題も解決されるのみならず、一定の妥当性を見出せる生成文法の $\theta$ 理論にも応用が可能となる（但し、統語論の自律性の問題は依然として残る）。本稿で先行研究とした Baker (1988) の動詞シエル構造には対応できないが、Baker は統語構造の位置に準じて意味役割を決定しようとした点で、本稿や従来 of 場所理論の趣旨から外れているように思われる。

統語構造における格は様々な研究でほぼ同様に決定されているにもかかわらず、パラレルな関係にある項構造における意味役割が研究ごとに曖昧なのは、ひとえに項構造が可視的に具現化されないということに尽きる（意味の研究が統語の研究よりも発達していないのもその理由の一つであろう）。今後は統語と意味のインターフェイスを意識しながら EN 否定における諸々の条件を分析していくことを課題としたい。

#### 文献目録

- Anderson, J. (1971) *The Grammar of Case: Toward a Localist Theory*. Cambridge University Press.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press.
- Bosque, I. (1980) *Sobre la negación*. CATEDRA.
- Bruyne de, J. (1999) “Las preposiciones”, *Gramática descriptiva de la lengua española*. vol.1. 657-703. ESPASA.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Mouton de Gruyter.
- Chomsky, N. (1982) *Noam Chomsky on the Generative Enterprise*. Foris.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. University of Chicago Press.



- Diesing, M. (1992) *Indefinites*. MIT Press.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Gruber, J. S. (1965) *Studies in Lexical Relations*. MIT Press.
- Hartung, J. A. (1831) *Über die Casus, ihre Bildung und Bedeutung in der Griechischen und Lateinischen Sprache*. Palm & Enke.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of Language Faculty*. MIT Press.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」『語の意味と意味役割』 研究社出版.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar 2. Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Levin, B and Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会.
- Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Sánchez López, C. (1999) “La negación” *Gramática descriptiva de la lengua española*. vol.2. 2561-2634. ESPASA
- 田林洋一 (2006) 「スペイン語 EN の否定における構造概念の試案」『スペイン語学研究 21 号』 東京スペイン語学研究会.
- Ungerer, F. & Schmid, H, J. (1996) *An introduction to Cognitive Linguistics*. Longman.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University

Press.

- 1 Chomsky (1982) も意味役割の規定に関して研究者ごとに恣意的であり、慎重な態度が必要であると言及している。
- 2 (2b) では Pedro が María にお金を「渡した」だけであって、お金の所有権が Pedro から María に移動したことを示唆するものの、断言はしていない。
- 3 (2f) において述語分解した際に起点と着点の意味素性はどこから来るのかという問題は、Jackendoff (1990)、Goldberg (1995) 他を参照。
- 4 場所理論では基本的に意味役割と項を Chomsky (1981) の  $\theta$  理論に従って、一対一の対応関係として説明している。
- 5 本稿では加賀 (2001) の意味役割のマクロな三分類を、従来の場所理論の反例とはなりうる点から支持する。1.4 参照。
- 6 具体的な反論としては Goldberg (1995) の構文文法、Levin and Rapoport (1988) の語彙従属化等を参照。
- 7 コピュラ文の場所理論による説明は池上 (1981) 参照。
- 8 ここでの移動の種類は文献によって様々だが、本稿では Chomsky (1995) に従い Move とする。
- 9 間接目的語が固有名詞だと、le の生起は任意である。(Le) dio una carta a María en la sala. は、Le がなくても容認可能である。
- 10 Jackendoff (1997) は統語論以外にも音韻と意味にも自律性を持たせるべきだと主張する。意味が自律性を持つならば移動前の要素に意味役割を付与することも可能だが、Baker の説明理論の枠組みから外れる。
- 11 本稿の方針は意味役割を述語ごとの異なる名詞句の意味の共通性の抽出、ないしは事象の参加者を決定する要因の一つとして捕らえるだけと考えるなら、いささか厳し過ぎるかもしれない。しかし、意味役割が同時に意味の差異も表すとするならば本稿の方針は一定の理解を得られると考える。
- 12 具体的な図と地の分析は Langacker (1991)、河上 (1996)、Ungerer (1996) 他を参照。
- 13 ここで挙げた意味役割素性は暫定的なものであり、有限個の意味役割素性に還元することが出来れば、意味役割における決定的な論となりうる。
- 14 (15a) と (15c) の差異は、John gave a book to Mary, but she didn't receive it. が容認可能なのに対し、\*John gave Mary a book, but she didn't receive it. が容認不可能なことからも導き出せる。
- 15 命題が同一ということは、(16a) での動詞 give が導き出した [+MOVE] という素性と、(16c) での構文知識である二重目的語構文が生み出した <+着点> が明示的でないということである。二重目的語構文には「移動を意図する」意味が付随するが、移動が必ずしも達成されるわけではない。

- (i) a. Chris baked Jan a cake.  
b. Chris baked a cake for Jan.

Goldberg (1995 : 32)

---

(i a) は移動を含意するが、Jan がケーキを受け取ったかどうかは不明である。それどころか、Jan はケーキが作られたことすら知らない可能性があるにもかかわらず、移動を含意する。それに対して (i b) には移動の含意はない。動詞に移動の意味がない *Mary taught Bill French.* と *Mary taught French to Bill.* の対立は比喩的拡張、*His talent would earn him double his present salary.* は多義的になる。これら「やりもらい構文」は非常に興味ある存在である。

16 本稿での「状態」の定義はあくまで便宜的である。物理的な状況での「状態」と抽象的な状況での「状態」という区別とは別に、動的か静的かに関して後者を「状態」と呼ぶこともあるが、本稿では区別しない。

17 一時的という特徴は *healthy* という語の内在的な語彙特性の一つであり、意味役割素性として扱う必要がないという考え方もある。本稿では深く立ち入らないが、ここでは *kind* 等のように恒久的なステイタスを表す語と区別するために暫定的に取り入れた。

18 EN 否定が起こる条件は以下のとおりである。田林 (2006 : (15)) を参照。

i) 動詞の意味を修飾する選択的前置詞句または副詞があってはならない。

ii) 原則として EN は広範な範囲を指し示す名詞句 (主に時間表現)、またはある特定の広範ないしは全体を指し示す名詞句と結合しなければならない。

iii) EN 前置詞句は主題化されなければならない。

本稿では上記の条件のうち、ii) のみを考察の対象とする。

19 統語的特性ではなく、意味的特性 (本稿では意味役割素性)、語用論的特性によって極性が変化する表現の存在は、生成文法が主張するいわゆる統語論の自律性の反証となりうる。現在の生成文法と認知言語学の対立は畢竟統語論の自律性に還元されると思われるが、本稿では基本的に後者の立場を取る。